

# コロナ禍における子どもの運動あそび —保護者に対するアンケート調査の結果から—

## A Study on Infant's Physical Activity during the Spread of COVID-19: From a Questionnaire Survey for Parents

中谷 昌弘  
Akihiro NAKATANI

### <要旨>

子どもの運動あそびは、その成長にとって、最も重要な役割を果たすと認識されている。2019年末から始まった新型コロナウイルス COVID-19の影響下で、人々の生活は大きく制限を受け、子どもたちの運動する環境は大きく変化した。コロナ禍以前より、子どもたちの運動不足は指摘されていたが、コロナ禍以降、より深刻な問題になったと言われている。コロナ禍が子どもたちの運動する環境にどのように影響を及ぼしているのかを明らかにするために、本研究では都市型と郊外型の二つの幼稚園を選びアンケートを行い、クロス集計を用いて比較検討した。その結果、コロナ禍で体を動かす機会は減り、子どもは運動不足になっていること、新型コロナウイルス感染症による外出自粛などの制限が、親だけでなく、子どものストレスにも影響していることが分かった。このような状況を改善するために、運動あそびの場を工夫して提供すること、自宅など限られた環境でも体を動かせる取り組みを構築していくことが必要となってくるのではとの結論に至った。また、保育士や幼稚園教諭だけでなく、保護者や幼児教育を学ぶ学生に対して、子どもの発達に見合った運動あそびを指導できる取り組みも必要だと確認することができた。

キーワード: 新型コロナウイルス・コロナ禍・子ども・運動あそび・幼児体育・保育内容「健康」

### 1. はじめに

1962年から1967年にかけてアメリカで行われたペリー就学前プロジェクトは、その後40年を経て、目標に向かってやり抜く力や集中力、自制心、他の人との協調性などの「非認知能力の育成」に大きな効果があり、40年後の調査においてもはっきりした有意な差が生じることの発見につながった (James 2017; Leslie 2013)。幼児期において、十分に考えられた教育の機会を提供することが重要であることが、改めて再認識されたわけである。

日本においても、幼児にとって最も重要な教育指針として、「健康(健康な心と体を育て自ら健康で安全な生活をつくり出す力を養う)」、「人間関係(他の人々と親しみ、支え合って生活するために、自立心を育て、人とかかわる力を養う)」、「環境(周囲の様々な環境に好奇心や探究心をもってかかわり、それらを生活に取り入れていこうとする力を養う)」、「言葉(経験したことや考えたことなどを自分なりの言葉で表現し、相手の話す言葉を聞こうとする意欲や態度を

育て、言葉に対する感覚や言葉で表現する力を養う)」、「表現(感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする)」の5領域が設定され、全人的な成長が促されることが期待されている。中でも、運動することは重視されており、文科省は、策定した幼児期運動指針の中で、「幼児は、様々な遊びを中心に、毎日合計60分以上楽しく体を動かすことが大切」と要約し、身につけられた運動習慣が、生涯にわたる健康的で活動的な生活習慣の形成に寄与する可能性に言及している。そして、幼児が思い切りのびのびと運動することによって、物事に意欲的に取り組む態度が養われ、健やかなこころの育ちを促す効果があると結んでいる。日本スポーツ協会も、文部科学省の方針とタイアップした「Active Child Program」において、1日60分以上の運動を奨励し、幼児期の健康な心と身体の育成は、その後の成長に非常に重要な要素であると述べている。

昨年の年初から始まった新型コロナウイルス COVID-19 の流行は、社会に広く深刻な影響を与えている。特に経済的なダメージの大きさは計り知れず、その影響の深刻さは深く分析していく必要がある。とりわけ、その幼児の生活に与えた影響は、計り知れないと思われる。我々は、その実態をまず明らかにすることを試みる必要がある。本稿を含む、筆者の取り組みはこれを問題意識として行っている。

筆者は、二つの環境の異なる幼稚園（H幼稚園、N幼稚園）を抽出し、それらを比較検討した。H幼稚園はH市郊外に、N幼稚園はN市中心部に存在する。これらをそれぞれA圏（郊外型）、B圏（都市型）として選んだ。

筆者の取り組みは、H幼稚園で2020年12月にアンケートを実施することからスタートした（中谷、2021a）。そこで得られた結果は、次の通りである。

(1) 幼稚園に通う園児の保護者の過半数は、コロナ禍の影響を受け、子どもの運動不足を認識している。

(2) 子どもの活動は屋外のものが増えているだけでなく、屋内運動量を見ても、日本スポーツ協会の指針を下回る子どもが少なくない。

(3) 特にコロナ禍の負の影響として、保護者が子どもを友達と遊ばせることに不安を感じている。

ここで得られた結果が一般性を有しているかは、十分に検討されなければならない。そこで、筆者は、環境の異なるN市B圏にあるN幼稚園にて、H幼稚園で行ったものと同様のアンケートを行い、比較検討することを企画した。N幼稚園で行ったアンケートの単純集計の結果を見ると、その傾向は基本的にH幼稚園の結果と同じであったが、N幼稚園は、その立地条件から、より都会密集地にあり、屋外で遊ばせる場所の確保に苦労するなど、コロナ禍の影響をより深刻に受けている実態が浮かび上がってきた（中谷、2021b）。本稿は、それらの結果を基に、さらに分析を進めたものである。

## 2. 調査の手法と調査対象の幼稚園が置かれている環境の違い

### 2.1 調査の手法

本稿の執筆にあたり、実施したアンケートの調査の方法は、次の通りである。

H 幼稚園の場合は、園児の保護者に、園長をつうじて、2020 年 11 月 25 日にアンケート文を配布した(アンケート文は、(中谷 2021b) に記す)。不同意の場合には、回答文を提出しなくて良いこと、それによる不利益は一切ないことを説明し、無記名で回答を回収した。回収された回答数は 144 名 (1 歳児から 3 歳児 28 名、年少 43 名、年中 33 名、年長 40 名、回収率 83%) であった。その後、2021 年 6 月 21 日に同様の手続きで N 幼稚園にアンケートを配布し、6 月 28 日に回収した。回収数は 86 名 (3 歳児 26 名、4 歳児 30 名、5 歳児 30 名、回収率 92%) であった。回収されたアンケート結果の Excel への入力はずべて筆者が 1 人で行い、解析は SPSS を用いて行った。

### 2.2 倫理的配慮

本研究の調査は、桃山学院教育大学の研究倫理審査委員会の承認を得て実施した。データは研究のための保管期間終了後、破棄する。(承認番号:21 桃教大総第 3-21)

### 2.3 アンケートの時期の違い

二つの幼稚園での調査は、アンケートの実施時期が異なる。H 幼稚園で実施してから半年後に N 幼稚園で同様のアンケート調査を実施したことになる。この半年間で、ワクチン接種がスタートしたり、繰り返し緊急事態宣言や、まん延防止等重点措置が政府より発令されたりしている。そのため、この時間差が両幼稚園の回答結果の差の 1 つの要因になっている可能性は否定できない。しかしながら、コロナ禍の終息が見通せない点は共通しており、調査の時期の違いはそれほど深刻な影響がないと筆者は考えて、以下の解析を行った。

### 2.4 調査対象の 2 つの幼稚園の置かれている地域の特徴

アンケートを比較する前に、二つの幼稚園はそれぞれ郊外型, 都市型という異なる環境に置かれていることについて述べたい。

H 幼稚園の所在地 (H 市) の総人口は約 53 万 2 千人、総世帯数は約 24 万 3 千世帯(令和 3 年 7 月 1 日現在)に対し、N 幼稚園の所在地 (N 市) の総人口は、約 35 万 4 千人、総世帯数は 16 万 6 千世帯(令和 3 年 7 月 1 日現在)である。

2021 年 6 月に新たにアンケートを実施した N 幼稚園は、大阪や京都の都市部へのアクセスが良い N 市の中心に立地している。都市としての生活環境が整っている反面、子どもたちが外で自由に遊べる環境は限られている。一方、H 幼稚園は、H 市の北部に位置し、H 市と商工業が盛んな F 町に挟まれてはいるが、山に囲まれ農村地帯の特色も残っている地域である。幼稚園の母体である H 学園は広大な敷地を有しており、園児たちは幼稚園の園庭だけでなく、自然の中で遊ぶことができる。この点で、N 幼稚園と H 幼稚園の運動あそびと家庭環境は大きく異なっ

ているといえる。

## 2.5 コロナ禍によって子どもの運動あそびや、園での生活が制約された状況に関する先行研究

新型コロナウイルスは、子どもたちの生活や運動環境にどのような影響を与えているのだろうか。筆者と同様な問題意識を持っている研究者は少なくなく、探索的な取り組みが幾つか確認できる。ここでは、コロナ禍による影響を受けた幼稚園・保育園での取り組み、とりわけ園での生活と運動あそびに関して注目した議論や、幼児の運動能力低下に関わる論考を挙げることにしたい。

まず、コロナ禍によって幼稚園や保育園での生活が制限されていることに着目した議論についてとりあげる。

全国保育協議会の調査や先行研究によると(柏崎 2020; 渡辺 2020; 久家 2021)、コロナ禍において保育士らは感染に対する不安を多く抱えていたという。また、子どもたちが人との距離感を学ぶ必要があるものの、保育園は三密を避ける事ができない空間であり、園児のマスク着用や手洗い指導の徹底、複数の子どもが触れる場所の消毒などを行いながら、ソーシャルディスタンスを確保できるようなルールを遊びに取り組みむといった工夫をしなければならなかったという。また、定期的な室内の換気や食事中の会話を控えるなどに注意する対策を行ったという。

コロナ禍が運動あそびに与えている影響についての考察には、次のようなものがある。

たとえば、(久家 2021)によると、子どもの成長において欠かすことができない行事である運動会において、密を避けるため学年ごとの入れ替え制と参観する保護者に人数制限を設けることで「運動遊び参観日」として実施した園があるという。また、観覧の人数を制限し、競技内容や競技数の見直しを行い、密を避けられないものについては中止や規模縮小しておこなった園(柏崎 2020)や、夏のプール遊びについては、コロナ禍で「プール中止」にするのではなく、プールに代わる「水を使った遊び」を考えた園も見受けられたという。これらのように、「保育者の用意する環境や関わり次第で、子どもが夢中になり、たくさんのことを学び、豊かな経験が大切になる」と論じている(野上 2020)。

先行研究などが指摘する事例を見る限り、現場では、コロナ禍だからこそ子どもたちが安全に楽しんで身体を動かす機会を工夫しながら実践していることがうかがえる。また、多くの保護者がこれまで以上に室内遊びの工夫をしている。そのため、山田(2021)は、「我が子にヒットした室内遊びの工夫」を保護者から集めて、「遊び集」を作成し共有できるようにしておけば、今後、自粛があってもより楽しく過ごせ、保護者も安心するのでは」という提案を行っている。

ただ、現実問題として、幼児の運動能力が低下していることを危惧する文献もある。神奈川県教育委員会教育局スポーツ課による1986年から2006年の20年間で4回行われた幼児の運動能力測定などに代表されるように、現代の幼児の運動経験は過去に比べ少なくなっている。基本動作を5歳頃までに経験しないと、成長に伴う身体能力の向上に障壁ができ、新しい技術



の習得が困難になると言われており、幼稚園や保育園による自然と子どもの運動量が多くなるような教材の提供が鍵になるとされる（智原 2011）。本来「生活はすべて遊びからできている」はずの幼児であっても、あえて「運動あそび」を取り入れていかないと、大人と同じように運動不足に陥ってしまうことを指摘する意見もある（小堀 2021）。また、スポーツ庁健康スポーツ課が 2021 年 2 月に行った調査結果資料（「コロナ禍における運動・スポーツの実施について」）によると、コロナ禍による子どもの健康への影響として、発育期の健全な成長が妨げられることが、問題提起されている<sup>1</sup>。

### 3. アンケートの結果の分析

#### 3.1 本論文の解析の目的

アンケートの質問項目は多岐にわたっているが、本論文では、(1) 保護者が認識している子どもの運動不足がどのような要因と関係があるか、(2) それらの要因が園の位置する環境と関係があるか、の 2 点に焦点をしばって解析を進めた。保護者がコロナ禍で子どもの運動不足が進んでいると認識していること、アンケート全体について、H 幼稚園と N 幼稚園とで、有意な違いがあることは既に報告しているが（中谷 2021a, 中谷 2021b）、それらのより深い解析がこの論文の主題である。なお、本稿に関わる回答結果の単純集計は、参考資料として末尾にまとめて掲載している。

#### 3.2 クロス集計による分析

今回のアンケートで得られた結果の間にどのような相関関係があるかを検討するにあたって、「現在、子どもが運動不足を感じているか」との問いに関して「感じている」「どちらかといえば感じている」そして「どちらかといえば感じていない」「感じていない」の 4 つにカテゴリ分けし、他の 6 つの問いとの相関関係を検証することとした。

---

<sup>1</sup> それを受け、具体的な実践、提言も行われている。たとえば、小野（2021）は、外出機会の減少による健康二次被害の予防対策として、子どもを持つ家族向けにリーフレットを作成し、心身の健康に悪影響を及ぼす警告を行っている。

また「危機的状況における遊び 子どものくらしに関わる人のためのガイド 2020」も、危機的状況下において遊ぶことの重要性が訴えられており、親子で遊ぶ時間を最大限に活かす事が大切と指摘し、外で遊ぶことは「こころとからだの健康によいもの」と訴えている。

表1 「日本スポーツ協会の身体活動ガイドライン」とのクロス集計の結果

【H 幼稚園】

質問	回答	(6) ガイドライン				合計
		30分未満	30分から1時間	1時間から2時間	2時間以上	
(3) 子どもの運動不足を感じているか	感じている	37.5%	50.0%	12.5%	0.0%	100.0%
	どちらかといえば感じている	22.6%	29.0%	45.2%	3.2%	100.0%
	どちらかといえば感じていない	9.5%	47.6%	28.6%	14.3%	100.0%
	感じていない	7.9%	28.9%	36.8%	26.3%	100.0%
合計		13.6%	38.6%	33.6%	14.3%	100.0%

対称性による類似度	値	近似有意確率
Cramer の V	0.222	0.014
有効なケースの数	140	

【N 幼稚園】

質問	回答	(6) ガイドライン				合計
		30分未満	30分から1時間	1時間から2時間	2時間以上	
(3) 子どもの運動不足を感じているか	感じている	44.4%	22.2%	33.3%	0.0%	100.0%
	どちらかといえば感じている	33.3%	51.5%	15.2%	0.0%	100.0%
	どちらかといえば感じていない	6.1%	57.6%	33.3%	3.0%	100.0%
	感じていない	16.7%	33.3%	0.0%	50.0%	100.0%
合計		22.2%	49.4%	23.5%	4.9%	100.0%

対称性による類似度	値	近似有意確率
Cramer の V	0.411	0.000
有効なケースの数	81	

表1は、「現在、子どもが運動不足を感じているか」と「日本スポーツ協会の、子どもの身体活動ガイドライン」の回答のクロス表である。日本スポーツ協会では「子どもの身体活動ガイドライン」によると、最低限必要な子どもの身体活動量は「1日60分」と定義している。両変数の間のCramerの連関係数VはH幼稚園では0.222、N幼稚園では0.411、統計的な有意確率はH幼稚園では0.014、N幼稚園では0.00という結果が得られ、子どもの運動不足を感じている保護者の方が、身体活動ガイドラインを下回っている子どもが多い傾向があることが確認された。

また、H幼稚園、N幼稚園ともに子どもの運動時間が少ないほど、保護者が運動不足を感じている。その割合はN幼稚園の方が顕著である。これは実際の運動時間そのものに有意な差があり、N幼稚園の方が運動不足である実態がより深刻であることを意味する。子どもの運動不足を感じているにも関わらず、子どもの身体活動ガイドラインを超えて運動できていないのは問題であり、コロナ禍で解決しないといけない重要な問題の一つであると考えられる。

表2 「子どもがコロナ前と比べて運動する機会は増えたか」に対する認識とのクロス集計の結果

【H 幼稚園】

質問	回答	(7) コロナ前と比べて運動機会は増えたか				合計
		減った	どちらかといえば減った	変わらない	増えた	
(3) 子どもの運動不足を感じているか	感じている	87.5%	0.0%	12.5%	0.0%	100.0%
	どちらかといえば感じている	25.8%	45.2%	16.1%	12.9%	100.0%
	どちらかといえば感じていない	14.5%	25.8%	25.8%	33.9%	100.0%
	感じていない	5.0%	12.5%	37.5%	45.0%	100.0%
合計		18.4%	24.8%	26.2%	30.5%	100.0%

対称性による類似度	値	近似有意確率
Cramer の V	0.337	0.000
有効なケースの数	141	

【N 幼稚園】

質問	回答	(7) コロナ前と比べて運動機会は増えたか				合計
		減った	どちらかといえば減った	変わらない	増えた	
(3) 子どもの運動不足を感じているか	感じている	37.5%	50.0%	0.0%	12.5%	100.0%
	どちらかといえば感じている	37.1%	45.7%	14.3%	2.9%	100.0%
	どちらかといえば感じていない	20.6%	11.8%	61.8%	5.9%	100.0%
	感じていない	16.7%	0.0%	66.7%	16.7%	100.0%
合計		28.9%	28.9%	36.1%	6.0%	100.0%

対称性による類似度	値	近似有意確率
Cramer の V	0.344	0.001
有効なケースの数	83	

表2は、「現在、子どもが運動不足を感じているか」と「コロナ禍前と比べ、子どもが自宅外で体を動かす機会は増えたか」の回答のクロス表である。子どもの運動不足を感じている保護者の割合と、運動機会の増減との間にはっきりした相関(負の相関)があることが分かった。特にH幼稚園では、コロナ禍の下でも、運動不足を感じていない保護者の家庭では、運動機会が増えているとの回答結果を示しており、むしろ保護者が運動不足を積極的に補う努力をしている姿が浮かび上がってきている。この点はN幼稚園でも同様である。両変数の間のCramerの連関係数VはH幼稚園では0.337、N幼稚園では0.344、統計的な有意確率はH幼稚園では0.000、N幼稚園では0.001という結果が得られ、子どもの運動不足を感じている保護者が子どもの運動不足を考える原因の一つにコロナ禍による自宅外での運動が影響している傾向があることが確認された。

表3 「コロナ禍において家庭で子どもと一緒に体を動かしているか」とのクロス集計の結果  
【H 幼稚園】

質問	回答	(9) 子どもと一緒に体を動かしているか				合計
		動かしている	どちらかといえば動かしている	どちらかといえば動かしていない	動かしていない	
(3) 子どもの運動不足を感じているか	感じている	12.5%	25.0%	25.0%	37.5%	100.0%
	どちらかといえば感じている	3.2%	38.7%	54.8%	3.2%	100.0%
	どちらかといえば感じていない	7.9%	46.0%	28.6%	17.5%	100.0%
	感じていない	22.5%	50.0%	15.0%	12.5%	100.0%
合計		11.3%	44.4%	30.3%	14.1%	100.0%

対称性による類似度	値	近似有意確率
Cramer の V	0.236	0.005
有効なケースの数	142	

【N 幼稚園】

質問	回答	(9) 子どもと一緒に体を動かしているか				合計
		動かしている	どちらかといえば動かしている	どちらかといえば動かしていない	動かしていない	
(3) 子どもの運動不足を感じているか	感じている	11.1%	0.0%	66.7%	22.2%	100.0%
	どちらかといえば感じている	8.6%	17.1%	62.9%	11.4%	100.0%
	どちらかといえば感じていない	0.0%	48.4%	41.9%	9.7%	100.0%
	感じていない	16.7%	50.0%	16.7%	16.7%	100.0%
合計		6.2%	29.6%	51.9%	12.3%	100.0%

対称性による類似度	値	近似有意確率
Cramer の V	0.264	0.050
有効なケースの数	81	

表3は、「現在、子どもが運動不足を感じているか」と「コロナ禍において、家庭で子どもと一緒に体を動かしているか」の回答のクロス表である。この場合もはっきりした相関があるようである。子どもと一緒に体を動かしている保護者の家庭では、子どもの運動不足を感じていない。この度合いもH幼稚園の方が顕著であることが確認できる。N幼稚園の場合、子どもと一緒に体を動かす場所を見つけるために、より工夫が必要なのかもしれない。両変数の間のCramerの連関係数VはH幼稚園では0.236、N幼稚園では0.264、統計的な有意確率はH幼稚園では0.005、N幼稚園では0.050という結果が得られ、子どもの運動不足を感じているも関わらず、子どもと一緒に体を動かしていない親が多い傾向があることが確認できた。これもコロナ禍が子どもの運動あそびの機会減少に影響しているものと考えられる。

表4 「YouTubeなどを参考にして、体を動かした経験の有無」とのクロス集計の結果  
【H 幼稚園】

質問	回答	(11) Youtube		合計
		ある	ない	
(3) 子どもの運動不足を感じているか	感じている	25.0%	75.0%	100.0%
	どちらかといえば感じている	50.0%	50.0%	100.0%
	どちらかといえば感じていない	42.9%	57.1%	100.0%
	感じていない	42.5%	57.5%	100.0%
合計		43.4%	56.6%	100.0%

対称性による類似度	値	近似有意確率
Cramer の V	0.109	0.639
有効なケースの数	143	

【N 幼稚園】

質問	回答	(11) Youtube		合計
		ある	ない	
(3) 子どもの運動不足を感じているか	感じている	33.3%	66.7%	100.0%
	どちらかといえば感じている	45.7%	54.3%	100.0%
	どちらかといえば感じていない	42.9%	57.1%	100.0%
	感じていない	16.7%	83.3%	100.0%
合計		41.2%	58.8%	100.0%

対称性による類似度	値	近似有意確率
Cramer の V	0.155	0.561
有効なケースの数	85	

表4は、「現在、子どもが運動不足を感じているか」と「コロナ禍以降、YouTubeなどの情報を参考に、子どもと一緒に体を動かしたことがあるか」の回答のクロス表である。両変数の間のCramerの連関係数VはH幼稚園では0.109、N幼稚園では0.155、統計的な有意確率はH幼稚園では0.639、N幼稚園では0.561という結果が得られ、子どもの運動不足とYouTubeなどを参考にして、体を動かした経験との相関関係が有意にあるとは言えなかった。YouTubeを利用しているか否かの質問への回答は、H幼稚園、N幼稚園ともほぼ半々であるが、運動不足



への認識と相関関係がない。この結果は、YouTube などを利用した運動の活性化を行うには、考えなければならない高いハードルがあることを示唆している。

表5 「保護者のストレスの有無」とのクロス集計の結果

【H 幼稚園】

質問	回答	(14) 親はストレスを感じているか				合計
		感じている	どちらかといえば感じている	どちらかといえば感じていない	感じていない	
(3) 子どもの運動不足を感じているか	感じている	100.0%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%
	どちらかといえば感じている	28.6%	53.6%	7.1%	10.7%	100.0%
	どちらかといえば感じていない	23.2%	48.2%	16.1%	12.5%	100.0%
	感じていない	17.9%	56.4%	7.7%	17.9%	100.0%
合計		27.5%	48.9%	10.7%	13.0%	100.0%

対称性による類似度	値	近似有意確率
Cramer の V	0.259	0.002
有効なケースの数	131	

【N 幼稚園】

質問	回答	(14) 親はストレスを感じているか				合計
		感じている	どちらかといえば感じている	どちらかといえば感じていない	感じていない	
(3) 子どもの運動不足を感じているか	感じている	44.4%	33.3%	22.2%	0.0%	100.0%
	どちらかといえば感じている	25.7%	65.7%	2.9%	5.7%	100.0%
	どちらかといえば感じていない	34.4%	43.8%	9.4%	12.5%	100.0%
	感じていない	16.7%	66.7%	16.7%	0.0%	100.0%
合計		30.5%	53.7%	8.5%	7.3%	100.0%

対称性による類似度	値	近似有意確率
Cramer の V	0.201	0.353
有効なケースの数	82	

表5は、「現在、子どもが運動不足を感じているか」と「コロナ禍の影響を受け、保護者は以前よりも強いストレスを感じているか」の回答のクロス表である。両変数の間のCramerの連関係数VはH幼稚園では0.259、N幼稚園では0.201、統計的な有意確率はH幼稚園では0.002、N幼稚園では0.353という結果で、運動不足への認識と親の感じるストレスは、H幼稚園とN幼稚園で大きな違いが表れた。H幼稚園では、運動不足を認識する親は強くストレスを感じているのに対し、N幼稚園では有意な相関がみられない。特にH幼稚園で、運動不足を感じる保護者は100%ストレスを感じているというのは、強い危機意識の表れであろう。

表6 「子どものストレスの有無」とのクロス集計の結果

【H 幼稚園】

質問	回答	(15) 子どもはストレスを感じているか				合計
		感じている	どちらかといえば感じている	どちらかといえば感じていない	感じていない	
(3) 子どもの運動不足を感じているか	感じている	50.0%	37.5%	12.5%	0.0%	100.0%
	どちらかといえば感じている	6.9%	72.4%	10.3%	10.3%	100.0%
	どちらかといえば感じていない	8.1%	40.3%	43.5%	8.1%	100.0%
	感じていない	0.0%	43.2%	51.4%	5.4%	100.0%
合計		8.1%	47.8%	36.8%	7.4%	100.0%

対称性による類似度	値	近似有意確率
Cramer の V	0.297	0.000
有効なケースの数	136	

【N 幼稚園】

質問	回答	(15) 子どもはストレスを感じているか				合計
		感じている	どちらかといえば感じている	どちらかといえば感じていない	感じていない	
(3) 子どもの運動不足を感じているか	感じている	55.6%	33.3%	11.1%	0.0%	100.0%
	どちらかといえば感じている	36.4%	42.4%	21.2%	0.0%	100.0%
	どちらかといえば感じていない	5.9%	61.8%	26.5%	5.9%	100.0%
	感じていない	33.3%	16.7%	50.0%	0.0%	100.0%
合計		25.6%	47.6%	24.4%	2.4%	100.0%

対称性による類似度	値	近似有意確率
Cramer の V	0.274	0.030
有効なケースの数	82	

表6は、「現在、子どもが運動不足を感じているか」と「コロナ禍の影響を受け、子どもは以前よりも強いストレスを感じているか」の回答のクロス表である。両変数の間のCramerの連関係数VはH幼稚園では0.297、N幼稚園では0.274、統計的な有意確率はH幼稚園では0.000、N幼稚園では0.030という結果が得られ、子どもが運動不足だと認識している家庭では、子どものストレスも感じ取れるという点で共通していると確認された。

#### 4. 考察

##### 4.1 アンケート結果の考察

コロナ禍が長引き、1年半程度経過した現時点でも先行きが見えない状況の中、時間が経過すればするほど、子どもの運動不足の傾向は強まっているような印象を受ける。アンケートの結果から本当にコロナ禍の中で全国的に体を動かす機会は減ったのか、「現在、子どもが運動不足を感じているか」との6つの質問との間でクロス集計を行ったが、5つの問いに対して、両者の間に有意な関係があるという結果が得られた。

コロナ禍によって、親も子どもも、自宅で過ごす時間が増えた。子どもたちは遊ぶ場所や体を動かす機会が減り、その影響を心配している保護者が増えたことがデータから分かる。表 1 から、保護者が、子どもの運動不足を感じているにも関わらず、運動できていない家庭が多かった。さらに表 2 では、子どもが自宅外で運動する機会が減っているため、自宅内、家庭で体を動かす必要があるが、それを実践できている家庭は少ないことも分かった。また、全国データ資料から 9 割以上の親が子どもにとっての外遊びを重要視する一方で、「外遊びのバリエーション」や「遊ぶ場所に悩み」を抱えている実態が明らかになった。

さらに、新型コロナウイルス感染症による外出自粛などの大きな変化は大人だけでなく、子どものストレスにも影響しているようである。子どもたちも体を動かすことによってストレスを発散する事にもつながる。基本的に子どもたちは、身体を動かすことが好きなので、色々な工夫で運動あそびの場を提供する事が大切となってくる。

今回の比較から、H 幼稚園よりも都市密集型の N 幼稚園の子どもたちの方が、自宅外で運動できるところが制限されている等の影響から体を動かさず、郊外型の H 幼稚園の子どもたちよりもストレスを感じていることが確認できた。

これを解消する手段の一つとして、オンラインをこれまで以上に活用することが考えられる。指導する側と自宅や園にいる子ども達とリモートで結び、テレビや携帯電話の画面越しに運動あそびを行う。さらに、他の園と競争をしたり、協力し合ったりする遊びも考えられる。将来は地域対抗のリモート運動会などが普通になる時代がくるかもしれない。そうすれば、今回のアンケート結果に見られるような地域格差も解消すると思われ、住環境によっても子どもの運動あそびへの影響は少なくなるのではないかと考えられる。しかし、YouTube の利用については、H 幼稚園、N 幼稚園の保護者とも十分な対応ができていない。オンラインでの諸活動を、より活性化するためには、なお一層の種々のハードルを下げていかなければ、利用が活性化していかない現実があるようである。

## 4.2 コロナ禍の中での運動あそび

「幼児期運動指針ガイドブック」のまとめによると、現代の幼児の遊びには活発に身体を動かすものが減っており、その結果、身体のコアが未熟な幼児が増えているという。その一方でサッカーや水泳、体操などの習い事が盛んになることで、特定の運動ばかり行う幼児が多くなっている。いわゆる「運動する子ども」と「運動をしない子ども」の二極化が進んでおり、コロナ禍によって、それはより一層顕著になってくると考えられる。このことは、自発的な遊びにつながっていない可能性も指摘されており、与えられた環境で体を動かすことも大切だが、自発的に体を動かすことができる環境の整備も必要となってくる。

## 4.3 今後に向けて

2018 年、幼児教育の改善・充実を目的として、「保育所保育指針」「幼稚園教育要領」「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」の 3 つが同時に改訂された。育みたい能力・資質を、「知識

および技能の基礎」「思考力・判断力・表現力等の基礎」「学びに向かう人間性等」3つの柱に分類した。また、資質・能力の育ちの視点を「10の姿」で具体的に捉えて、3,4,5歳児の「子どもの姿ベース」の活動計画をわかりやすく描いた。運動あそびには、10の姿の一つである「健康な心と体」だけではなく、「自立心」を育むこと、互いに話しあったり、アイディアを出し合う「共同性」、「言葉による伝え合い」、「道徳性・規範意識の芽生え」「社会生活との関わり」「思考力の芽生え」そして「豊かな感性と表現」などほぼすべてが網羅されている。

神経系が特に発達する幼児期には、運動あそびを通して多様な動きを経験させることが大切となってくる。幼少期の運動あそびは子どもたちの成長に大きく影響を与えるという。スキヤモンの発育発達グラフによると、運動能力の発達にかかわる神経系の発達は3~4歳ごろが最も著しい。この大切な時期に、コロナ禍によって運動する機会が減ることは社会全体が考えないといけない課題と言える。普段の生活の中からも、遊び感覚で体を動かすことによって体力をつけていく。その習慣が幼児期には大切となる。

with コロナ時代における運動あそびは、これまで以上に「量」ではなく「質」が大切となってくる。さらにコロナ禍における運動あそびの工夫として、自然とソーシャルディスタンスを確保しながら活動できる内容の開発が望まれる。改めて運動あそびを開発するとの考え方でなく、例えば、これまでの影を踏むといった鬼ごっこもある。しっぽとり鬼ごっこでは、通常よりしっぽを長くしたり、用具の共有を避けるためバトンの代わりに、新聞紙を丸めたものをバトン替わりとし個人で所有したり、自然に距離が確保できるルールだったり、密にならないように、オーガナイズを工夫すれば、今までと同じように楽しめる運動あそびも沢山ある。また、自宅でも手軽にできる遊びとして、運動する用具がなくても身近にある新聞紙やタオルを使えばボールにもなるし、風船を使つての親子でキャッチボールなど工夫次第で、いつでもどこでも簡単に運動量を確保できる。

また、保護者が自ら調べて子どもと一緒に体を動かすだけでなく、保育士、幼稚園教諭がYouTubeやSNSを利用し、情報発信することが求められるし、幼児教育で学ぶ学生らに、その手段を教授することが必要となってくる。幼稚園や保育園で子どもと直接かかわる保育者が、楽しく、そして簡単に子どもたちと運動あそびをすることができる環境構成や、教材を開発することが重要となってくる。養成校として、子どもの発達に見合った運動あそびを提供できる保育者を養成することが課題となる。

コロナ禍は親が体を動かすことの大切さを再確認したきっかけになったと前向きにとらえ、これまで以上に組織的な取り組みが必要となる。with コロナ時代の今こそ「スポーツの価値」を広める必要があり、今後のwith コロナの社会を見据え、ソーシャルディスタンスを確保した上での集団遊びや、家庭内でできる遊びを工夫していく必要があるのではないかと。

【引用・参考文献】

- 小野善朗 (2021) 「コロナ禍という現象と子どもの育ちへの影響」『世界の児童と母性』  
Vol. 89. P2-P5
- 柏崎裕子 (2020) 「保育園の取り組みと現状からみえるもの」『自治労の保育運動』 Vol. 43.  
P3-P5
- 久家さや加 (2021) 「コロナ禍における幼児教育-「制限」を前向きに捉えた実践-」『日本女子  
大学教職教育開発センター』 第7号. P83-P89
- 小堀哲郎 (2021) 「幼児の「運動遊び」とは何か-その社会的考察-」『体育の科学』  
Vol. 71. P252-P257
- 智原江美 (.2011) 「幼児期の発育発達からみた運動遊びの考え方」『研究紀要京都[京都光華  
女子]』 49(-). P7-P17
- 中谷昌弘 (2021a) 「コロナ禍における幼児の運動遊び～姫路日ノ本短期大学附属幼稚園のア  
ンケートから～」『研究紀要[姫路日ノ本短期大学]』 第43号. P45-P59
- 中谷昌弘 (2021b) 「コロナ禍における領域「健康」の指導方法 ～環境の異なる園の幼児の運  
動あそびの比較を通して～」 『研究紀要 [奈良保育学院]』 第19号増刊. P11-P31
- 日本スポーツ協会「アクティブチャイルドプログラム・ガイドブック」 P1-P20
- 野上美香 (2020) 「ウイズコロナ時代の「新しい保育」に向かって」『自治労の保育運動』  
Vol. 43. P6-P8
- 三谷大紀・北野幸子・松山洋平/執筆・無藤隆・大豆生田啓友/編著「3・4・5歳児の子どもの  
姿のベースの指導計画」『フレーベル館』. P10-P11
- 無藤隆/編著「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」『東洋館出版社』. P38-P57
- 山田真理子 (2021) 「コロナ禍の休校で失われたもの-遊びへの影響と学校の役割」『世界の  
児童と母性』 Vol. 89. P17-P21
- 渡辺みどり (2020) 「新型コロナウイルス対策と子どもの発達を思う」『子どものしあわせ』  
833号. P40-P43
- James J. Heckman and Dimitriy V. Masterov (2007) The Productivity Argument for  
Investing in Young Children, Review of Agricultural Economics, 29(3). 446-449
- Leslie M. Gutman and Ingrid Schoon (2013) The impact of non-cognitive skills on  
outcomes for young people: literature review, Education Endowment Foundation  
(London), 1-57.



**A Study on Infant's Physical Activity during the Spread of COVID-19:  
From a Questionnaire Survey for Parents**

Akihiro NAKATANI

Under the spread of COVID-19, lack of infant's physical action chances seems to increase. In the present study, questionnaires were performed at two kindergartens located on the suburbus (H-city) and downtown (N-city) . Data strongly show that infants' play time decreases, specially out of houses. The results are also related with stress effects both on infants and parents.

参考資料 アンケート結果 単純集計比較

(全て%表記)

(1) 子どもが運動不足であると感じていたか。

	1.いつも感じていた	2.ときどき感じていた	3.あまり感じなかった	4.全く感じていなかった	5.分からない
H幼稚園	15.3	41.0	34.7	8.3	0.7
N幼稚園	21.8	44.8	25.3	5.7	1.1

(2) 子どもが友だちと遊ぶことに不安があったか。

	1.いつも不安があった	2.やや不安があった	3.あまり不安はなかった	4.全く不安はなかった	5.分からない
H幼稚園	9.0	53.5	31.3	5.6	0.7
N幼稚園	8.0	51.7	31.0	8.0	0.0

(3) 現在、子どもが運動不足だと感じているか。

	1.運動不足と感じている	2.どちらかといえば、運動不足と感じている	3.どちらかといえば、運動不足とは感じていない	4.全く運動不足とは感じていない	5.分からない
H幼稚園	5.6	22.2	43.8	27.8	0.7
N幼稚園	10.3	40.2	40.2	6.9	1.1

(4) 現在、子どもが友だちと遊ぶことに不安があるか。

	1.不安はある	2.どちらかといえば不安はある	3.どちらかといえば不安はない	4.全く不安はない	5.分からない
H幼稚園	9.0	41.0	37.5	11.1	1.4
N幼稚園	11.5	44.8	31.0	8.0	3.4

(5) コロナ禍において開催されているプロ野球やJリーグのTV中継を見て不安を感じるか。

	1.不安を感じる	2.どちらかといえば不安を感じる	3.不安を感じない	4.なんとも言えない	5.分からない
H幼稚園	16.0	22.9	25.7	29.9	5.6
N幼稚園	9.2	27.6	27.6	21.8	12.6

(6) 日本スポーツ協会では、子どもの身体活動ガイドラインとして、最低限必要な子どもの身体活動量を1日60分と定義している。今週1週間を振り返ってみて、子どもがご自宅の中で体を動かしていた1日あたりの時間は平均して概ねどのくらいか。

	1.30分未満	2.30分以上1時間未満	3.1時間以上2時間未満	4.2時間以上	5.分からない
H幼稚園	13.2	38.2	32.6	13.9	2.1
N幼稚園	21.8	46.0	21.8	4.6	4.6

(7) コロナ禍前と比べ、子どもが自宅外で体を動かす機会は増えたか。

	1.減った	2.どちらかといえば減った	3.ほとんど変わらない	4.増えた	5.分からない
H幼稚園	18.1	25.0	25.7	29.9	1.4
N幼稚園	27.6	27.6	35.6	5.7	2.3

( 8 ) コロナ禍前と比べ、子どもが主として体を動かす場所に変化はあったか。

	1.あった	2.なかった
H幼稚園	55.6	44.4
N幼稚園	34.5	64.4

( 9 ) コロナ禍において、家庭で子どもと一緒に体を動かしているか。

	1.動かしている	2.どちらかといえば動かしている	3.どちらかといえば動かしていない	4.動かしていない	5.なんともいえない
H幼稚園	11.1	44.4	29.9	13.9	0.7
N幼稚園	5.7	27.6	49.4	11.5	4.6

( 10 ) コロナ禍以降、子どもの運動不足解消の観点から、何か始められたことはあるか。

	1.ある	2.ない	3.自分の子どもが運動不足とは思っていない
H幼稚園	15.3	66.0	18.8
N幼稚園	31.0	54.0	13.8

( 11 ) コロナ禍以降、YouTubeなどを参考に、子どもと一緒に体を動かしたことがあるか。

	1.ある	2.ない
H幼稚園	43.1	56.9
N幼稚園	40.2	58.6

( 12 ) コロナ禍において、子どもが家庭でゲームする時間は増えたか。

	1.増えた	2.どちらかといえば増えた	3.変化はほとんどない	4.どちらかといえば減った	5.減った	6.家庭ではゲームをさせていない(またはできない)	7.分からない
H幼稚園	15.3	15.3	20.8	2.1	2.1	43.8	0.7
N幼稚園	17.2	21.8	19.5	2.3	0.0	37.9	0.0

( 13 ) コロナ禍前と比べて、子どもが絵本を見たり、話に親しんだりする時間は増えたか。

	1.増えた	2.どちらかといえば増えた	3.変化はほとんどない	4.どちらかといえば減った	5.減った	6.分からない
H幼稚園	17.4	26.4	49.3	4.2	2.1	0.7
N幼稚園	13.8	37.9	44.8	2.3	0.0	0.0

( 14 ) コロナ禍の影響を受け、保護者は以前よりも強いストレスを感じているか。

	1.感じている	2.どちらかといえば感じている	3.どちらかといえば感じていない	4.感じていない	5.なんともいえない
H幼稚園	25.0	45.1	9.7	11.8	8.3
N幼稚園	28.7	50.6	9.2	6.9	3.4

( 15 ) コロナ禍の影響を受け、子どもは以前よりも強いストレスを感じているか。

	1.感じていると思う	2.どちらかといえば感じていると思う	3.どちらかといえば感じてるとは思わない	4.感じてるとは思わない	5.なんともいえない
H幼稚園	7.6	45.1	35.4	6.9	4.9
N幼稚園	24.1	46.0	23.0	2.3	3.4

( 16 ) コロナ禍の影響において自宅で行ったこと。

	1.家遊び	2.運動器具購入	3.youtube体操	4.絵本の読み聞かせ	5.外で遊べる器具	6.英語DVD	7.三輪車、自転車	8.その他
H幼稚園	26.0	8.0	13.0	21.0	6.0	8.0	16.0	2.0
N幼稚園	26.0	9.0	10.0	20.0	7.0	12.0	12.0	4.0

( 17 ) コロナ禍の影響での家庭での変化。

	1.食事衛生面	2.家族時間増	3.コミュニケーション増	4.人混み避ける	5.在宅時間増	6.喧嘩増	7.その他
H幼稚園	27.0	18.0	7.0	37.0	3.0	6.0	1.0
N幼稚園	26.0	19.0	8.0	36.0	5.0	3.0	2.0

( 18 ) コロナ禍で外出や運動する機会が減る傾向にあると言われているが、子どもの発育・発達に悪い影響を及ぼすと思っているか。

	1.そう思う	2.どちらかといえばそう思う	3.どちらかといえばそう思わない	4.そう思わない	5.分からない
H幼稚園	29.2	47.9	8.3	6.3	8.3
N幼稚園	20.7	49.4	11.5	9.2	8.0

( 19 ) 子どもの学年構成。

	1.年少	2.年中	3.年長	4.1.2.3歳児
H幼稚園	29.9	22.9	27.8	19.4
N幼稚園	29.9	34.5	34.5	0.0

( 20 ) 兄弟構成。

	1.はい	2.いいえ
H幼稚園	45.8	54.2
N幼稚園	35.6	63.2

( 21 ) 親のスポーツ歴。

	1.全国大会を目指すレベルでスポーツをしていた	2.同好会・サークルレベルで楽しくスポーツをしていた	3.高校時代、スポーツはしていない
H幼稚園	13.9	32.6	53.5
N幼稚園	12.6	18.4	67.8